

今後のまちづくり

金沢市若松・鈴見地区土地区画整理組合 まちづくり委員会
委員長 瀧 建憲三

組合員の皆様、あけましておめでとございます。

昨年8月に開催しました「平成10年度通常総会」で本地区の事業計画期間を3ヶ年延長し、平成13年度といたしました。

地権者との関係で工事が遅れている部分と田上第五地区との境界付近での工事に着手できないためであることは、ご報告いたしましたとおりであります。

その他の工事につきましては、通常総会での決議に従い、皆様のご協力を得ながら順調に進んでおりますことをまずご報告いたしたいと思っております。

新たに進めております街づくりに関してのご報告をしたいと思います。

当組合事務所用地において、地域のコミュニティの拠点となる施設の立地方法についてこれまで検討を進めてまいりましたが、金沢市担当課との話合により、児童館を中心とする施設誘致が可能となり、平成12年度完成を目標に調整を進めていくことになりました。

そこで、対応組織として、「金沢市若松・鈴見地区児童館、地区交流会館建設準備委員会」を発足しました。

児童館との併設を考えて 地区交流会館は、本地区に小学校が建設されたのちには公民館として活用されていくものではありませんが、当面小学校の建設が見込めないことから、それまでの間の暫定的な地域コミュニティ会館として運用していくものです。

施設内容、運営方式などについては、これから検討が始まりますので、ここで詳細にご報告できるものではありませんが、通常総会でもコミュニティ拠点施設の要望があったことを受けたものとして、今後進展がございましたら、ご報告したいと思います。

センター地区にあります大型保留地については、これまで「複合交流センター」を要望し、地域住民、金沢大学教職員・学生、他高等教育機関関係者が交流し、地域の活性化・シンボルにもなりうる施設を考えてまいりました。

しかし、金沢市では公的な施設を誘致するには敷地面積が小規模であることから、オープン・スペース的な活用方法も考えられるとの提案を受けております。

実現・調整にはまだ時間がかかるかと思いますが、当初の目的である地域の活性化・シンボル性のある施設誘致を今後とも積極的に進めていく所存であります。



キレイな住宅 ①

悩める子供たちを救うために設計でできること

気になる記事が日経アーキテクチャに載っていましたので、子供がおられる御家庭では新築・改築の際に参考にしてください。

家族をはぐくむ住宅を求めて

神戸の事件を始めとして、少年による残虐な犯罪が紙面をにぎわしている。非行、いじめ、家庭内暴力、不登校…。子供たちを巡る問題は社会に衝撃を与え、子供を持つ親には家族のあり方を問いただしている。

住まいがコンプレックスを生む。

人々が異口同音に「あんな子がどうして」と語るように、普通の家庭の普通の子が、目を覆いたくなるような凶悪犯罪を引き起こす。普通の家庭を築くことを目標にしてきた親たちは疑心暗鬼に陥り、自分の子供たちを色眼鏡で見ってしまう。家族は根元から揺さぶられている。少子化によって子供の数が減っている中、1997年度1年間に「学校嫌い」を理由として30日間以上欠席した不登校の小中学生は約10万5000人で、初めて10万人を超えた。中学生は53人に1人が不登校の計算となる。

子供が不登校になる理由は、さまざまにある。教師が嫌い、いじめに遭う、授業についていけない…学校に魅力がないことを原因とする一方、家庭環境による影響も否定できない。家庭の問題は住まいの問題でもある。静岡大学の外山知徳教授は、「住まい方は家族関係を表し、コンプレックスを生む」と住まいづくりに関わる者に警告を鳴らす。

文化の矛盾が子供たちに影を落とす。

第2次世界大戦後の民主主義教育の普及によって、日本は西洋の個人主義に基づく個室文化を取り入れた。しかし、ライフスタイルまで輸入することはできなかった。その矛盾が住まい方にひずみをきたし、子供たちに影を落としている。

「日本の気配を感じる文化は、西洋文化とは相容れない」と小説家の藤原智美氏は指摘する。個人主義が未成熟で「個」と「公」があいまいであるがゆえに、新しい住宅像が描きにくくなっていく。

住宅はもともと、住まい手である家族固有の生活に対応する設計がなされてきたはずだ。しかし、氾濫する情報に振り回され、「おしゃれな窓がほしい」などの断片的なイメージだけが先走ってしまう。「どのような家庭を築きたいのか」というビジョンを見失っている。

住宅が子供に与える影響は、すべてが解明されてはいない。住宅では解決できないとの見方もある。

しかし、これまでの蓄積から「キレイな住宅」の設計に役立つヒントを探し出すことはできないだろうか。

次回からは、このような視点から戸建て住宅を4ケース、集合住宅を2ケース紹介する。

たとえば土間のある吹き抜け空間を通して部屋同士の気配が感じられる住宅など、最初から「キレイな住宅」を意図して設計したものではないが、一つの解答例になるかもしれない。

私が考える子供と住宅の関係

壁紙は子供たちに選ばせる

HARUMI 建築設計事務所代表
浅野 春美

子供は中学生ぐらいになると自分の領域がほしくなり、親の干渉を嫌うようになる。この時期に「子供が部屋から出てこない」と心配して、無理矢理出てこさせようとしても意味がない。ある程度たてば出てくるので、このような時期は子供を尊重して、部屋に入らないようにする。これが親子の信頼関係をつくることにもなる。

子供が産まれたときに家を建てることを考えると、子供は生まれて20年間を家と一緒に成長することとなる。これは大人が経験する20年間とは比較にならないほど重要な意味を持つ。この大切な時期を一軒の家がすべてを請け負うだけに、設計者としていつも真剣に受け止めている。子供の心のよりどころになるような思い出に残れる家を作っていきたい。

子供がいる建築主の場合は、建てることを基準として考える。小学生くらいまでは個室をつくらずに大部屋で用意して、将来区切れるようにしておく。階段は上下の空間のつながりに配慮して、必ずリビングを通るようにしている。子供たちが家づくりに参加する経験から、新しい家に愛着をもてるように、子供部屋の壁紙は自分たちに選んでもらうようにしている。

子供部屋のドアは引き戸に

目白学園女子短期大学生活科学科教授
中島 明子

家族の関わり合いを考えると、食事のシーンは欠かせないと思う。調理や後片付けなど、キッチンでは共同作業を前提とする対面式が望ましい。掃除などの家事も、どんだん子供に任せられるようにする。家事を分担することは、家族のコミュニケーションの一環にもなる。

子供が思春期に入ると、個室は必要になってくる。中学生ぐらいの子供は一人きりになりたい反面、親に悩みを話したいときもある。このような子供の心情を組み入れると、子供部屋のドアは引き戸が望ましい。一人になりたいときはしっかり閉めておき、話し掛けてほしいときは少し開けておく。このように引き戸は、開き戸と違って人間関係のつなぎ方を微妙に調整できるからだ。子供部屋にはテレビや電話を持ち込ませない。持ち込みたければ親と折衝するぐらいのコミュニケーションが欲しい。

性別によって仕切り方を変える

像地域設計第一設計室長

岡沢 和子

住宅が込み合った地域、いわゆる狭小敷地での設計が多い、

かぎられた空間をいかに豊かに演出できるかが、設計のポイントになってくる。スキップフロアにして空間をつなげたり、壁を斜めに振って広く見せたりするなどの工夫を設計に盛り込むようにしている。

設計で苦労するのは、建築主の家族に子供が複数いる場合。子供が小さければ、できるだけ仕切らないようにしておき、子供が育つ過程で変化できるようにする。後で生まれてくる子供の性別によって、仕切り方が変わってくるからだ。

また勉強するときだけ仕切れるようにしておいて、普段は大きな空間で生活するなど、部屋の用途を組み替える手法も有効だと思う。吹き抜けと組み合わせることも空間を豊かにするコツ。子供が家づくりに参加しやすいように、打ちあわせには模型を持っていくようにしている。

子供部屋の考え方は千差万別

生活研究所代表
山本 厚生

住宅の設計に、一般解や理想解はない。「この家族にはどんな家がいいだろうか」と考えてはいけな。住む人の立場となつて、暮らしぶりや考え方、人間関係などの生活場面すべてを洗い出し、その家族独自の住まいづくりを考えていくようにしている。住宅雑誌から適切な事例を選び出せるほど、家族は類型化できるものではない。

子供部屋の考え方も同じことだ。雑誌に「子供部屋は必要だ」と書いてあったので子供部屋をつくるのではなく、その家族にとって子供部屋が必要かどうかを考える。だから私たちが設計する住宅は、子供部屋に対する考え方が建築主の家族に応じて千差万別になってくる。

このように家族の一人ひとりの生活場面を拾い出していくと、設計期間が長期にわたることになる。そこで設計料は料率ではなく、要した仕事量で見積もることにしている。コストダウンを図るため、製図作業には労力を割かない。打ちあわせをしながら起こしたスケッチを図面に利用している。打ちあわせは重要な作業になるので、単価を一番高く設定している。

キッチンで家族を結びつける

小説家

藤原 智美

子供部屋に気配を感じ取れる工夫を施した家をよくみかけるが、これは中途半端で意味がないと思う。監視していないと不安になる親の身勝手だ。しっかりとした空間を子供に与え、自由にさせてやるのが大切。やってはいけないことだけちゃんと教え込めばいい。

昔は家と労働が同じ場所に存在し、労働で否応無く家族が結びついていた。明治以降、家族の在り方は変質したが、「食べる」という行為は変わっていない。現在では食べることだけが唯一残された家族の結びつきになっている。だからこそ、母親が料理をつくる姿を見せる仕掛けが、キッチンには必要になる。テーブルの上を買ってきた調理済みの料理をいくら広げても意味がない。キッチンがプロセスの見えないブラックボックスでは、自動販売機と同じだ。

これからの時代、親子の対話をパソコン通信で行うことも考えられる。父親の帰宅が遅いときは、子供は父親の会社にパソコンで通信する。ただ同じ家に住んでいるだけで、親子の会話があったくない状況から考えると、ずっと健全だ。

家づくりは、家族の最大の共同行為になる。今まで失われてき

きた会話を回復するきっかけにもなる。子供にも参加させて、プロセスを見せてやるべきだ。

国際化に子供部屋は不可欠

大阪市立大学生活科学部教授
北浦 かほる

日本では、空間の管理など、個人主義に基づく権利が子供に与えられていない。これは、親が子供の身の世話をするために行う「見る」という行為が、問題視されていないことからでもわかる。この行為の必要性から、家族は場の共有を必須条件にしてきた。しかし、場を共有して精神的な安定を得るのは親だけだ。家族が同じ部屋にいても違う行為をしていれば、コミュニケーションは図れない。

昔の日本の住まいは、「気配」を感じるための場を共有することで、家族の安定を得てきた。だが、今の時代に場を共有することは必要だろうか。求められるのは、行為を共有することだと思ふ。一緒に食事をしたり、ゲームをするなど、行為の共有が子供に与える影響は多だ。

調査では、中学生ぐらいの子供にとって、行為の共有が多くなるほど父親像のプラスイメージが強くなるという結果が出ている。行為の共有がうまくいくような場のつくり方が、住宅に求められる。

家族が分離不可能な最小単位になっている日本では、家族を構成する相互のプライバシーは不要とされてきた。しかし国際化を目指すのであれば、そうも言ってもらえない。国際社会では個人のアイデンティティが求められ、個の自立、すなわちプライバシー意識の確立が重要になってくる。日本は個人主義に基づくプライバシーという文化がなかったため、プライバシー意識を育む子供部屋の存在意義は大きい。

金沢市若松・鈴見地区
土地区画整理組合

組合事務所

石川県金沢市若松町37街区10番地

電話 076(222)7730

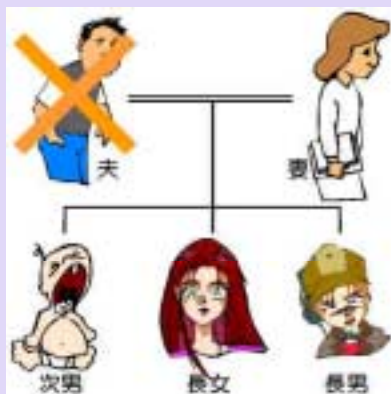
Fax 076(262)0026

金沢 杜の里



ホームページ
もごらんください。
<http://www.neting.or.jp/morinosato/home.html>

シリーズ「相続⑩」



養子

子が2人の場合は $1/2 \times 1/2 = 1/4$ となります。

妻…… 1/2
長男…… $1/2 \times 1/3 = 1/6$ (養子)
長女…… $1/2 \times 1/3 = 1/6$
次男…… $1/2 \times 1/3 = 1/6$

妻と実子と養子がいる場合の相続
子がいないので養子をもらうたら、後から実子ができるとい
ことがありません。
また、実子があつても事情で養子をもらうこともありま
す。
この場合でも妻は2分の1であることに変わりはなく、また、
養子であつても実子と何ら変わることもなく均等に頭割りする
ことになっています。
養子とは法律上血縁があるのと同じにすることであり、
実子と同じように取り扱われます。

シリーズ「相続⑩」

「金沢 杜の里」街づくり物語 あるプランナーの物語 ⑨

20 男の背中

イベントの最終行事であるカラオケ大会が終了した
何ヶ月にもわたる準備期間と2日間という短いイベ
ントの取り合わせが一挙に私の頭の中を通り過ぎ、イベ
ント実行委員長の閉会のあいさつが終了したとたん、私の
口から出た言葉が「終わった」の一言であった。
そのとたん、イベント会場からステージに集まるイベ
ント実行委員の面々……そのあとどうなったのかはほ
んど記憶がなく、何人かの胸上げのあと、道路に出て、
酒を呑んでいる自分がそこにあった。

土地区画整理組合理事からは大仕事を終わらせたね
ぎらいの言葉、イベント実行委員の喜びの笑い声、浅野
川通りと杜の里通りの交差点部分はもはや道路ではな
く、打ち上げパーティ会場となっている。急性アルコー
ル中毒にかかり救急車で運ばれたイベント出演者でも
ある大学生のいたことを知ったのはあとこのことである。
「地元人間でもないお前の一生懸命やる姿を見て、
続けてきた。」と言ったのは高校の先輩であり、「男は
男の背中を見て動く。」と言ったのはN氏であり、「羽
織り、袴を着て奥さんにあいさつに行かなければなら
ない。」と言ったのは土地区画整理組合理事であり、「大
学学園祭ののりの年齢では無いでしょ。」と言ったのは
私の妻であった。

組合からのお知らせ

「記念誌作成委員会」より

街づくり委員会では、内部に記念誌作成委員会を発足させ、組合事業の終了
時に行われる完工式典等に配布する記念誌作成のための資料収集を行うこと
にいたしました。

この記念誌には、本土地区画整理事業により失われつつある、本地域の歴史
を記憶にとどめておく、新しい街づくりの中にも、その文化を根づかせていく
ための「史誌」的な要素を持たせたいと考えております。

また、単なる地域史だけではなく、家紋や屋号、昔話なども載せていきたい
と考えておりますので、昔の写真などと合わせまして、お願いすることもある
うかと思いますが、よろしく願いいたします。

「児童館、地区交流会館建設準備委員会」より

委員構成は、理事長、副理事長1名、理事2名、田上校下連合同会会長、田上
校下公民館長、鈴見・若谷・本若松・上若松各町会会長です。